九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本語副詞の歴史的研究

川瀬，卓

https://hdl.handle.net/2324/1398289

出版情報：九州大学，2013，博士（文学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏名・(本籍・国籍)	かわせ　すぐる **川　瀬　　卓**（福岡県）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	文博甲第１７１号
学位授与の日付	平成25年8月31日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当　人文科学府　言語・文学専攻
学位論文題目	**日本語副詞の歴史的研究**
論文調査委員	（主　査）准教授　青木博史 （副　査）教　授　髙山倫明　　准教授　川平敏文 教　授　久保智之

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は日本語の副詞についての歴史的研究であり、次の三つを課題とする。１）個別の副詞の歴史を考察することによって、副詞がどのように歴史的に変化するのかを明らかにする、２）副詞を視点として日本語史の問題に光を当てる、３）副詞を視点として言語変化に関する新たな知見を得る。これらは、個々の副詞の歴史的変化を記述・説明することと、それをより広い視野から捉え直すということを目指したものである。本論文の特色は、文法の問題をふまえて副詞の歴史的変化を考察するとともに、副詞を視点として文法の問題を見直すというところにある。その意味で、本論文は語彙の歴史的研究であると同時に、文法の歴史的研究でもある。

副詞は語彙的側面と大きく関わるものから、文法的側面と大きく関わるものまで実に多様であって、語彙的にも文法的にもさまざまな問題と関わる。また、副詞は歴史的変化が著しく、動的性質を持つものでもある。したがって、副詞の歴史的研究は語彙研究と文法研究の接点となりうるものであり、多くの課題と可能性を持つ。しかし、副詞の歴史的研究はまだ立ち遅れている現状にある。とくに文法との関わりを積極的に意識した研究は十分になされていない。このような状況をふまえて、本論文は語構成的な問題や、副詞と述語との関わりなどの点に注意して、副詞の歴

史的考察を行った。

本論文は序論、擬声語・擬態語の副詞を扱った第Ⅰ部、不定語と助詞が結びついて一語化した副詞を扱った第Ⅱ部、そして結語によって構成される。序論では副詞の性質を整理し、副詞研究において歴史的変化を捉えることが必要であることを述べ、副詞の歴史的研究における課題と研究の可能性、および本論文の枠組みについて示した。

第Ⅰ部では擬声語・擬態語の副詞を対象として、副詞形成における形態的な問題や、具体的な意味が抽象化して時間や叙法性など文法的側面との関わりを強める変化について考察し、副詞の歴史的変化の諸相を示した。具体的には語尾「と」の脱落現象の通時的変化、「そろそろ」「ひょっと」の歴史について考察を行った。第 1 章では擬声語・擬態語における語尾「と」について、近世を通じて語尾「と」の脱落率が増していく過程を示すとともに、語尾「と」の機能について論じた。第 2 章では擬声語・擬態語が時間を表す副詞になる事例として、「そろそろ」の歴史について考察した。動きの様態を表していた「そろそろ」が変化の進展を表す用法を派生させ、さらに事態を時間に位置付ける用法が派生していくこととその要因について論じた。第 3 章では擬声語・擬態語が叙法副詞になる事例として、「ひょっと」およびその肥大形である「ひょっとすると」などの歴史について考察した。動きの様態を表していた「ひょっと」が仮定や可能性想定を表す副詞になり、さらに近代以降「する」が接続した「ひょっとすると」などの形式になることについて論じた。また、その歴史の日本語史的位置付けを考察し、「ひょっとすると」などの複合的な形式の成立と定着が、近代語の分析的傾向の事例として捉えられることを述べた。

第Ⅱ部では不定語と助詞によって構成される副詞を対象として、それぞれの副詞が叙法副詞として確立していく変化、およびそれらの日本語史的位置付けを考察した。扱った不定語は「なにも」「どうも」「どうやら」「どうぞ」「どうか」である。まず、第 4 章では不定語の歴史的研究において助詞との結びつきに注目することが重要な観点となることを述べ、考察対象と問題の所在を明らかにした。第 5 章ではどのようにして叙法副詞の「なにも」が成立したのかに重点をおいて、「なにも」の歴史について考察した。「なにも」が否定との結びつきを強めたのち、非存在文をきっかけとして叙法副詞「なにも」が成立したことを述べた。第 6 章では「どうも」の歴史について考察した。「話し手の期待の非実現」という結果・結論が不変であることを強調するものであった「どうも」が、「話し手の期待の非実現」が「話し手の期待通りでないことの実現」と読み替えられることによって用法の拡張を起こし、さらに「事態成立に対する話し手の判断」という性格をも獲得することを論じた。歴史的事情を考えることで、マイナス評価性、多義性などの問題についても説明を与えた。第 7 章では〈漠然的認定〉を表していた「どうやら」が、判断的側面を強めて〈推定〉用法を獲得したことを述べた。第 8 章では「どうぞ」が聞き手利益の行為指示である〈勧め〉を表す叙法副詞となっていくことを示し、対人配慮表現の歴史と関連付けた。第 7 章と第 8 章では「どうか」と「どうやら」「どうぞ」の関わりについても考察し、「どうか」が「どうぞ」の変化を促したことも示した。第 5 章から第 8 章までで、否定がきっかけとなって起きる言語変化（「なにも」「どうも」）、推定表現を表す副詞になって認識的な叙法との関わりを強めていく変化（「どうも」「どうやら」）、行為的な叙法との関わりを強め、対人配慮の表現になる変化（「どうぞ」「どうか」）について論じたことになる。第 9 章では助詞の変遷との関連に注目することで、第Ⅱ部で考察してきた副詞の成立に、係り結びの衰退という日本語文法史上の大きな変化が関わっていることを示した。

結語では本論文の考察を全体的にまとめるとともに今後の課題を述べた。本論文の考察によって、次のような成果が得られたといえる。まず、今まで十分明らかにされていなかった副詞の歴史や、そこに見られる特徴的な現象について、具体的なありようが描けた。また、副詞を視点とすることによって、近代語の分析的傾向、係り結びの衰退との関わりなど、日本語史における様

々な問題が見えてくることも示せた。述語形式に注目するだけでなく、副詞と述語形式の関わりを視野に入れることは、今後の日本語史研究において重要な視点の一つになる。さらに、副詞の歴史的研究が、言語変化に関する、より一般的な問題に対して貢献できる可能性も示せた。本論文では、理論的な考察について十分な議論を行ったわけではないが、否定と言語変化との関わり方、文法化、語彙化などと関わる現象を示したことは、今後の研究につながるものであると考えられる。今後の課題としては、さらに体系的な考察を目指して個々の副詞の歴史的変化を扱うこと、示された日本語史上の問題についてその内実を明らかにしていくこと、個別性を超えた普遍的な言語変化の問題としても考察を進めていくことなどをあげた。

以上のように、本論文は、副詞の歴史的研究が多くの問題と絡み合うものであり、きわめて射程の広い研究であるということを示した。

論文審査の結果の要旨

本論文は，従来その文法論的・語彙論的性格から敬遠されがちであった副詞を正面に据え，日本語史の動的な側面を描いた意欲的な試みである。

まず，序論では，先行研究を概観しながら副詞の性質を整理し，副詞の歴史的研究における課題と研究の可能性について示した。

次に第Ⅰ部では，擬声語・擬態語の副詞を対象として，副詞形成における形態論的な問題，意味の抽象化に伴って時間性や叙法性などを獲得していく意味論的な問題について考察した。第1章では，擬声語・擬態語における語尾「と」について，時代が下るとともに「と」の脱落率が増していく過程を示し，併せて語尾「と」の機能について論じた。第2章では，「そろそろ」を取り上げ，動きの様態を表していた「そろそろ」が変化の進展を表す用法を派生させ，さらに事態を時間に位置付ける用法が派生していく過程とその要因について述べた。第3章では，「ひょっと」およびその肥大形である「ひょっとすると」について，動きの様態を表していた「ひょっと」が〈仮定〉や〈可能性想定〉を表す副詞になり，さらに近代以降「する」が接続した「ひょっとすると」などの形式を生み出す様相について論じた。この第Ⅰ部では，個別の副詞語彙の分析にとどまらず，副詞全体における形態変化との関係，さらには近代語における分析的傾向といった，日本語における一般的な歴史変化の趨勢との関係を論じるなど，視座の広さに瞠目させられた。

そして第Ⅱ部では，不定語と助詞によって構成される副詞を対象として，それぞれの副詞が叙法副詞として確立していく変化について考察した。第4章では，不定語と助詞との結びつきに注目することの重要性を述べ，考察対象と問題の所在を示した。第5章では，叙法副詞「なにも」について，「なにも」が否定との結びつきを強めた後，非存在文をきっかけとして叙法副詞として成立したことを述べた。第6章では，「どうも」について，「話し手の期待の非実現」といった〈結果〉に注目する表現から，「事態成立に対する話し手の判断」へと拡張することを論じた。第7章では，「どうやら」について，〈漠然的認定〉から判断的側面を強めた〈推定〉へ変化する過程とその要因を述べた。第8章では，「どうぞ」について，聞き手利益の行為指示である〈勧め〉を表す叙法副詞となっていくことを示し，対人配慮表現の歴史と関連付けた。これらの言語変化を引き起す契機としては，否定との関係（「なにも」「どうも」），認識的な叙法との関係（「どうも」「どうやら」），対人配慮表現との関係（「どうぞ」「どうか」）が想定され，日本語史における重要な現象として位置付けられる。最後の第9章では，助詞の変遷との関連に特に注目し，これらの副詞の成立に，係り結びの衰退という日本語文法史上の大きな変化が関わっていることを示した。それぞれの副詞語彙の形式間における関係については考察の余地を残すものの，言語変化を引き起

こす諸要因について様々な観点からアプローチしており，説得力のある記述となっている。

以上のように，本論文は個別の副詞語彙の観察から出発し，様々に絡み合う文法現象を丹念に掬い取り，きわめて興味深い歴史記述を行うことに成功している。副詞を視点とした日本語史の記述的研究という新しい分野を開拓するものとして，今後のさらなる発展が期待される。

よって本調査委員会は，本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つ者であると認めるものである。